

【 第 140 聖詠 第 8 調 】



しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、しゅよわれにききたまえ。
主 我 聽 給

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、なんぢによぶときわがいのりの
主 爾 呼 時 我 禱

こえをいれたまえ、しゅよわれにききた給
聲 納 給 主 我 聽 給

まえ、ねがわくはわがいのり
願 我 禱

はこうろのかおりのごとくなんぢが
香 爐 の 香 如 爾

かんばせのまえにのぼり、わがてを
顔 前 登 我 手

あぐるはくれのまつりのごとくいれられん
舉 暮 祭 如 納

しゅよわれにききたまえ。
主 我 聽 給

誦經) しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ ころ よこしま ことば
主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言

かたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら
に傾きて、不法を行う人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の

あまみ な ぎじん われ ばつ こ きょうじゆつ われ せ こ い うるわ
甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と美

あぶら わ こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき かれら
しき膏、我が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の悪事に敵す。彼等

しゅちよう いわお あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くた
の首長は巖石の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り砕き、

わ ほね ぢごく くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの
我が骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、

わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま
我が霊を退くる母れ。我が爲に設けられし罟、不法者の網より我を護り給え。

ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ す え
不虔者は己の網に罹り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第 1 4 1 聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち
を其前に顯せり。我が霊の衷に弱りし時、爾は私の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと
に於て、彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認む

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ
る者なし、我に遁るる所なく、我が霊を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて

い なんぢ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま
云えり、爾は私の避所なり、生ける者の地に於いて私の分なり。我が呼ぶを聴き給

われはなはだよわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
え、我甚弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強けれ

ばなり。

わ たましい ひとや ひ いだ われ なんぢ な さんえい たま
⑩ 我が霊を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給え。

けいてい にくたい ものいみ たましい ものいみ およそ ふぎ むすぼれ と きよう
兄弟よ、肉體にて齋し、霊にても齋せん。凡の不義の結を解き、強

はく わな た およそ ふせい かきつけ さ う もの かに あた むしゆく もの いえ
迫の縞を斷ち、凡の不正なる書券を裂き、飢うる者に糧を與え、無宿の者を家に

い かん かん おおい あわれみ え ため
入れん、ハリストス神より大なる憐を得ん爲なり。

なんぢおん われ たま とき ぎじん われ めぐ
⑨ 爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

けいてい にくたい ものいみ たましい ものいみ およそ ふぎ むすぼれ と きよう
兄弟よ、肉體にて齋し、霊にても齋せん。凡の不義の結を解き、強

はく わな た およそ ふせい かきつけ さ う もの かに あた むしゆく もの いえ
迫の縞を斷ち、凡の不正なる書券を裂き、飢うる者に糧を與え、無宿の者を家に

い かん かん おおい あわれみ え ため
入れん、ハリストス神より大なる憐を得ん爲なり。

しゅ われふか ところ なんぢ よ しゅ わ こえ き たま
⑧ 主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、

いか とく いか ほまれ これ せいしや き けだしかれら なんぢてん かたぶ くだ
如何なる徳、如何なる譽も、之を聖者に歸すべし。蓋彼等は爾天を傾けて降

もの ため おのれ くび つるぎ した かたぶ なんぢおのれ つく ぼく かたち う もの
りし者の爲に己の首を劍の下に傾け、爾己を罄して僕の形を受けし者の

ため そのち なが なんぢ へりくだり なら し いた くだ かみ かれら きとう よ
爲に其血を流し爾の謙卑に效いて、死に至るまで降り。神よ、彼等の祈禱に因

りて、爾が恵の多きを以て我等を憐み給え。

ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い
⑦願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

かみ じつけんしや しとら じつ むけい ひ なんぢら ひか いなづま ごと
神の實見者たる使徒等よ、實に無形の日たるイイススは爾等を光れる電の若

く、全世界に遣して、爾等の神聖なる傳教の光明にて誘惑の暗を退け、無

ち くらやみ ふか かこ もの たら われら こうしょう おおい あわれみ くだ
知の幽暗に深く圍まれたる者を照せり。我等にも光照と大なる憐とを降さん

ことを彼に祈り給え。

しゆ も なんぢふほう ただ しゆ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと
⑥主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人

の爾の前に敬まん爲なり。

イリヤは 齋に照され、諸徳に因りて神聖なる車に登りて、天の高きに擧れり。

わ けんひ たましい かれ なら およそ あくしん そねみ あらそい はかな いつらく せい
吾が謙卑の靈よ、彼に效いて、凡の惡心と、猜忌と、争闘と、儂き逸樂とを制

するを以て齋と爲せ、ゲエンナの永遠なる甚しき苦惱を免れて、ハリストスに呼

ばん爲なり、主よ、光榮は爾に歸す。

われしゆ のぞ わ たましいしゆ のぞ われかれ ことば たの
⑤我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

神聖なる使徒等、世界の爲に至りて熱心なる祈禱者、正教の者の守護者よ、我

等爾最尊き者に求む、ハリストス我等の神の前に勇敢なる力を有ちて、我等の

爲に祈り給え、我等が齋の好き期を安らかに送りて、一性なる三者の恩寵を受

けん爲なり。尊榮なる大傳道師よ、我等の靈の爲に祈り給え。

わ たましいしゆ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ
④我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

われふとう もの へび か きず いき ししや たお ふ しふく
我不當の者は蛇に噛まれ、傷つけられて、氣息なき死者として仆されて伏す。至福な

せいせいしゃ なんぢ ちから きとう もつ すみやか われ おこ たま わ なんぢ すみやか き
る成聖者よ、爾の力ある祈禱を以て速に我を興し給え、我が爾の速に聽

おんちょう さんえい ため
く恩寵を讚榮せん爲なり。。

ねが しゆ たの けだしあわれみ しゆ おおい あがない かれ
③願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、

かれ そのことごと ふほう あがな
彼はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

われふとう もの へび か きず いき ししや たお ふ しふく
我不當の者は蛇に噛まれ、傷つけられて、氣息なき死者として仆されて伏す。至福な

せいせいしゃ なんぢ ちから きとう もつ すみやか われ おこ たま わ なんぢ すみやか き
る成聖者よ、爾の力ある祈禱を以て速に我を興し給え、我が爾の速に聽

おんちょう さんえい ため
く恩寵を讚榮せん爲なり。。

ばんみん しゆ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ
②萬民よ、主を讚め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讚めよ、

きけつ もの わ たましい あ おもい くら ねむ み われ とら つと
詭譎の者は我が靈が悪しき思に味まされて眠れるを見て、我を捕えんことを務

や かみ きとう よ われ なた すく たま
めて息めず、神よ、ニコライの祈禱に由りて我を宥めて救い給え。

けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゆ しんじつ なが そんな
①蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

しふく なんぢ われらしゆう ため おおい すくい あらわ なんぢ しょぼく およそ
至福なるニコライよ、爾は我等衆の爲に大なる救と顯れたり、爾の諸僕を凡の

きなん かんなん ゆうわく しょびょう こうげきおよ み しょてき すく たま
危難、患難、誘惑、諸病、攻撃及び見えざる諸敵より救い給えばなり。

【 生神女讚詞 第3調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまでも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今
いつもよよに、アミン。
何時 世 世
いさぎよきものよ、なんぢがきせきのちか
潔 者 爾 奇 跡 力
らはおおいなり、けだしなんぢはかんなん
大 蓋 爾 患 難

よりたすけ、しよりすくい、ま待
 助 死 救 い 待
 たざるわがわいよりのがれしめ、うれい
 禍 脱 憂
 をと き、ひとびとのざいかをのぞき
 解 人 人 罪 過 除 ぞ ぎ
 たもう。
 給

【 聖入 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つし} 肅 ^た みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの
 聖 福 常 生 天 父
 せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ
 聖 光 榮 穩 光
 ススハリストスよ、われらひのいりにいたりく
 我 等 日 入 至 暮
 れのひかりをみて、かみちちとことせいしん
 光 見 神 父 子 聖 神
 をうと う。いのちをたもうかみのこ
 歌 生 命 賜 神 子
 よ、なんちはいつもけいけんのこえにてうたわ
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌

る べ し 、 ゆ え に せ か い は なん ぢ を あ が め
 故 世 界 爾 崇
 ほ む 。
 讚

【 第一の提綱 】

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、^{えいち} 睿 ^{つつし} 智、^き 謹 ^き みて聴くべし。

誦經) ^{だいご} プロキメン、^{しらべ} 第五の ^{しゅ} 調、^{なんぢ} 主よ、^{われら} 爾 ^{たも} は我等を保ち、^{われら} 我等 ^{まも} を護りて、^こ 斯 ^よ の世より ^{えい} 永

^{えん} 遠 ^{いた} に至らん、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよよりえいえんにい
 斯 世 永 遠 至
 たらん。

誦經) ^{しゅ} 主よ、^{われ} 我 ^{すく} を救い ^{たま} 給え、^{けだしぎじん} 蓋 ^た 義人は絶えたり、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよよりえいえんにい
 斯 世 永 遠 至
 たらん。

誦經) ^{しゅ} 主よ、^{なんぢ} 爾 ^{われら} は我等を保ち、^{われら} 我等 ^{まも} を護りて、



司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{そうせいき よみ} 創世記の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

【 創世記 1章24節～2章3節 】

誦經) ^{かみい} 神曰えり、^{ち いきもの} 地は生物を^{そのるい} 其類に^{したが} 従いて、^{かちく} 家畜と、^{はうもの} 昆虫と、^{ち けもの} 地の獸とを^{そのるい} 其類に^{したが} 従いて産すべし。即、^{すなわち} 斯く成れり。神は^{かみ} 地の^{ち けもの} 獸を^{そのるい} 其類に^{したが} 従いて、^{かちく} 家畜を^{そのるい} 其類に^{したが} 従いて、^ち 地の^{もろもろ} 諸の^{はうもの} 昆虫を^{そのるい} 其類に^{したが} 従いて造れり。神之^{つか} を^{かみこれ} 觀て^{み よし} 善とせり。神曰えり、^{かみい} 人^{ひと} を^{われら} 我等の^{ぞう} 像と^{われら} 我等の^{しょう} 肖とに^{したが} 従いて^{つか} 造るべし。彼は^{かれ} 海の^{うみ} 魚と、^{うお} 天空の^{そら} 鳥と、^{とり} 獸と、^{けもの} 家畜と、^{ぜんち} 全地と、^ち 地に^は 匍う^{ところ} 所の^{もろもろ} 諸の^{はうもの} 昆虫とを^{つかさど} 宰るべし。神乃^{かみすなわちおのれ} 己の^{ぞう} 像に^{したが} 従いて人^{ひと} を^{つか} 造り、^{かみ} 神之^{ぞう} 像に^{したが} 従いて^{これ} 之を^{つか} 造れり。之を^{これ} 男女に^{なんによ} 造れり。神^{かみかれら} 彼等を^{しゆく} 祝して曰えり、^う 生めよ、^ふ 殖えよ、^ち 地に^み 充てよ、^{これ} 之を^{おさ} 治めよ、^{またうみ} 又^{うお} 海の^{けもの} 魚と、^{そら} 獸と、^{とり} 天空の^{もろもろ} 鳥と、^{もろもろ} 諸の家畜と、^{ぜんち} 全地と、^ち 地に^は 匍う^{ところ} 所の^{もろもろ} 諸の^{はうもの} 昆虫とを^{つかさど} 宰れ。神又曰えり。視よ、^{かみまたい} 我^み 爾^{われなんぢ} 等に、^{ぜんち} 全地^{おもて} の^{あたね} 面^ま に^{ことごと} 在る^{くさ} 種^{およ} を^ま 蒔^{たね} く^{いだ} 悉^み くの^{むす} 草^{ところ} 、^{たね} 及び^い 、^み 蒔^{むす} く^{ところ} べき^{ところ} 核^{ところ} を^{ところ} 懐^{ところ} く^{ところ} 實^{ところ} を^{ところ} 結^{ところ} ぶ^{ところ} 所の^{ところ} 事^{ところ} ごと^{ところ} 悉^{ところ} くの^{ところ} 樹^{ところ} を^{ところ} 與^{ところ} へたり。此れ^{ところ} 爾^{ところ} 等^{ところ} の^{ところ} 糧^{ところ} と^{ところ} 爲^{ところ} らん、^{ところ} 又^{ところ} 地^{ところ} の^{ところ} 凡^{ところ} て^{ところ} の^{ところ} 獸^{ところ} 、^{ところ} 天空^{ところ} の^{ところ} 凡^{ところ} て^{ところ} の^{ところ} 鳥^{ところ} 、^{ところ} およ^{ところ} 及^{ところ} び^{ところ} 地^{ところ} を^{ところ} 匍^{ところ} う^{ところ} 所の^{ところ} 凡^{ところ} て^{ところ} の^{ところ} 昆虫^{ところ} 、^{ところ} 凡^{ところ} そ^{ところ} 生命^{ところ} ある^{ところ} 者^{ところ} には^{ところ} 、^{ところ} 我^{ところ} 食^{ところ} として^{ところ} 凡^{ところ} て^{ところ} の^{ところ} 青^{ところ} き^{ところ} 草^{ところ} を^{ところ} 與^{ところ} へたり。即^{ところ} 斯^{ところ} く^{ところ} 成^{ところ} れり。神^{ところ} は^{ところ} 其^{ところ} 造^{ところ} り^{ところ} し^{ところ} 悉^{ところ} くの^{ところ} 物^{ところ} を^{ところ} 觀^{ところ} て^{ところ} 、^{ところ} 甚^{ところ} 善^{ところ} し^{ところ} と^{ところ} せり。夕^{ところ} あり^{ところ} 朝^{ところ} あり^{ところ} 、^{ところ} 是^{ところ} れ^{ところ} 第^{ところ} 六^{ところ} 日^{ところ} なり。斯^{ところ} く^{ところ} 天^{ところ} 地^{ところ} 及^{ところ} び^{ところ} 其^{ところ} 悉^{ところ} くの^{ところ} 装^{ところ} 飾^{ところ} は^{ところ} 成^{ところ} れり。神^{ところ} は^{ところ} 第^{ところ} 六^{ところ} 日^{ところ} に^{ところ} 其^{ところ} 造^{ところ} り^{ところ} たる^{ところ} 工^{ところ} を^{ところ} 竣^{ところ} え^{ところ} 、^{ところ} 第^{ところ} 七^{ところ} 日^{ところ} に^{ところ} 其^{ところ} 造^{ところ} り^{ところ} たる^{ところ} 悉^{ところ} くの^{ところ} 工^{ところ} より^{ところ} 息^{ところ} めり。神^{ところ} は^{ところ} 第^{ところ} 七^{ところ} 日^{ところ} を^{ところ} 祝^{ところ} し^{ところ} て^{ところ} 、^{ところ} 之^{ところ} を^{ところ} 聖^{ところ} に^{ところ} せり、^{ところ} 蓋^{ところ} 斯^{ところ} の^{ところ} 日^{ところ} に^{ところ} 於^{ところ} て^{ところ} 神^{ところ} は^{ところ} 造^{ところ} り^{ところ} たる^{ところ} 其^{ところ} 悉^{ところ} くの^{ところ} 工^{ところ} より^{ところ} 息^{ところ} めり。

【 第二の^{プロキメン}提綱 】

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

誦經) ^{だいろく} プロキメン、^{しらべ} 第六の調、^{しゅわ} 主我が^{かみ} 神よ、^{かえり} 顧 ^{われ} みて ^き 我に ^{たま} 聴き給え、

しゅわ が か み よ、 か え り み て わ れ に き き た 給。
主 我 神 顧 我 聴 給。
ま え。

誦經) ^{しゅ} 主よ、^{われ} 我を ^{まつた} 全く ^{わす} 忘るること ^{いづれ} 何の ^{とき} 時に ^{いた} 至るか、^{なんぢ} 爾の ^{おもて} 面を ^{われ} 我に ^{かく} 隠すこと ^{いづれ} 何の ^{とき} 時に ^{いた} 至るか、

しゅわ が か み よ、 か え り み て わ れ に き き た 給。
主 我 神 顧 我 聴 給。
ま え。

誦經) ^{しゅわ} 主我が ^{かみ} 神よ、

か え り み て わ れ に き き た ま え。
顧 我 聴 給。

【 祝福 】

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、^{ひかり} ハリストスの ^{しゅうじん} 光は ^{てら} 衆人を照らす。

誦經) ^{しんげん} 箴言の ^{よみ} 讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて聴くべし、

【 箴言 2章1~22節 】

誦經) ^わ 我が ^こ 子よ、^{なんぢ} 爾 ^{ことば} 若し我が ^い 言 ^わ を ^{いましめ} 納れ、^{おのれ} 我が ^{うち} 誠命を ^{おさ} 己の ^か 表に ^{なんぢ} 藏め、^{みみ} 斯くして ^{こえ} 爾の ^あ 耳 ^{ちえ} を ^{かたが} 智慧に ^{なんぢ} 傾 ^{こころ} け、^{さとり} 爾の ^む 心を ^も 聰明に ^{ちしき} 向け、^よ 若し ^{さとり} 知識 ^む を ^{こえ} 呼び、^あ 聰明に ^あ 向 ^あ 向いて ^あ 聲 ^あ を ^あ 揚

げ、若し銀の如く之を求め、寶の如く之を尋ねば、則爾主を畏るる寅畏を曉

り、神を知る知識を獲ん。蓋主は智慧を與え、知識と聰明とは其口より出ず、彼は

義人の爲に救を備う、彼は直く行く者の爲に盾なり、彼は公義の途を保ち、其

聖者の諸途を守る。是くの如くして爾は公義と公判と正直と一切の善き道

とを曉らん。智慧爾の心に入り、知識爾の靈に娛しからん時は、則思慮

は爾を守り、聰明は爾を保たん、是れ爾を惡しき途より、虚偽を言う人より救

い、直き途を離れて幽暗の路を行く者より、惡を行うを樂しみ、惡者の邪修を

喜ぶ者より、其途の曲り、其徑に迷う者より救わんが爲、爾を淫婦より、言

を以て諂う婦より、其少き時の教導者を棄てて、神の約を忘れたる者より救

わんが爲なり、蓋彼の家は死に引き、其徑は死亡者に趣く、彼に入る者は皆

かえ歸らず、亦生命の途に上らず。故に爾善人の途を行き、義人の諸途に循え、蓋

義人は地に居るを得、無玷の者は此れに留まらん、然れども惡人は地より滅ぼさ

れ、悖れる者は之より根絶されん。

司祭) 爾に平安、睿智、願わくは我が禱は香爐の香の如く爾が顔の前に登り、

我が手を擧ぐるは暮の祭の如く納れられん。

※ 願わくは我が禱は、、、へ